

林業と地域交流

林業を身近に感じて欲しい
木材の地産・地消は
「山を知る」ことから

山の魅力に触れて欲しい
桑野山の貯木場を拠点に、製材や木工加工、間伐など木材の利活用促進に取り組みながら「山や木材を意識しない生活が当たり前になっている人たちに、どう魅力を伝えれば良いか」と試行錯誤の毎日だったと鈴木さんは振り返ります。
そんな時、環境体験プログラムを数多く手がけてきたエコティかわねが、鈴木さんの思いに賛同し生まれたのが「ゼロからつくるテーブル作り」のイベントでした。このイベントは、



(上) 初めて間伐現場を見学した子どもたち
(左) 緊張しながらもチェーンソーを使い材木を加工する参加者 (右) 木工について談笑 話は尽きない



町産木材の 利活用促進のために

「地域の木材の利活用促進のために、この町の山や木材の魅力を発信していきたい」と3年前に川根本町の地域おこし協力隊となった鈴木健二さん。間伐ボランティアの経験を生かしながら、この町の林業発展に尽力してきました。

9月で任期を終える鈴木さんに、3年間の活動を聞くとともに、今後の展望を聞きました。

間伐が つないだ 交流の輪

川根本町に来る前、石油販売会社に勤めていた頃、東日本大震災後の被災地にガソリンなどの支援物資を運んでいた鈴木さん。被災地を訪れる度に「自分は何をすべきなのか」と何度か考えるようになったと言います。

その頃から、木工業界への転職を考え、林業系NPO団体に所属し、多くのイベントを開催してきました。そこで、偶然にも川根本町に移住し、山林の手入れを必要としている方と知り合いになりました。間伐を手伝ううちに「興味があったこととなりわいにできるチャンス。木の仕事に貢献することが自分の使命だ」と感じるようになり、一念発起して転職を決意しました。

木材の地産・地消を目指す

全国の山間地域では過疎化による高齢化や林業従事者の減少、管理放棄森林の増加によって林業界全体が衰退していると言われています。川根本町も例外ではないのですが、鈴木さんは「この町には真剣に山や木に向き合っている方が大勢いる」と印象を口にします。そんな先輩たちに

参加者自ら山に入り、木材を切り出し、1年間を掛けてテーブルを製作するというものです。
3年間の協力隊活動で、最も力を入れた思い入れ深い活動だと話す鈴木さん。「単純にテーブル作りをするだけではなく、山林が持つ環境保全機能や間伐作業の重要さを参加者に理解してもらうための有意義なイベントになった」と話します。

山と人をつなぐきっかけに

参加者の「木を切り倒したときの音や木材の感触は他では味わえない。本当に貴重な時間を過ごせました」の言葉に、手応えとやりがいを感じたと話す鈴木さん。「この町の山林を真剣に考えてくれる人や、関係者の『森林の大切さ、物作りの面白さを感じて欲しい』という思いがあつてこのイベントは成功したのだと思います。将来、そんな思いがこの町全体に広がって、地元の皆さんも巻き込むような大きな交流のきっかけになればと期待しています」と今後の活動について思いを語りました。



貯木場で製材作業をする鈴木さん

指導されながら「木材の効率的な地産・地消のシステムを作りたい」という目標が見えてきたと話します。しかし、その実現には山や木材の魅力を広げ発信しなければならぬことと同時に気づいたと言います。一般の方にどのように伝えれば良いのか、悩む鈴木さんの思いに答えることになったのが、町が募集していた『地域おこし協力隊(以下協力隊)』でした。
川根本町での生活にも慣れ、木工家として新たなスタートを切った鈴木さんは、この町の協力隊として、さらに活動の場を広げていくことになったのです。

木材を使うことは、山林の環境保全につながる

一般社団法人エコティかわね 代表理事 芦沢 哲哉さん

鈴木さんから「テーブルづくり」を提案されたとき、面白いイベントができると感じました。参加者に木工体験をしてもらうだけでなく、山林の役割や私たち人間が果たすべき義務を理解してもらえます。イベント自体1年間に及ぶものだったので、参加した方たちには、存分に川根本町の魅力を感じてもらえたのではと思います。

今後も、鈴木さんとともに山や木材の魅力を発信できるようなイベントを企画して、たくさんの川根本町ファンを増やせればと思います。そして、地元の皆さんにも今一度、この町の魅力に気づいてもらえるような活動を提案していきたいと思っています。

interview

